

われわれの外来における Opportunistic Infection の現況

栗山一夫*・馬場廣太郎
奥沢裕二・古内一郎

緒 言

感染症原因菌の変遷はこの10年間で著しいものがあり、これまでその主体をなしていたグラム陽性球菌に代つて、グラム陰性桿菌の急激な増加が注目をあびるようになってきている。なかでもいわゆる **Opportunistic Pathogen** ともいわれるところの、これまでは非病原性、もしくは弱病原性とされていた腸内細菌科のいくつかの属やブドウ糖非醗酵グラム陰性桿菌を原因菌とする感染症が目立つ増加傾向をみせつつある。

今回われわれは原因菌の検出、同定を行った外来患者由来株のうち、いわゆる **Opportunistic Pathogens** の中から緑膿菌以外のブドウ糖非醗酵グラム陰性桿菌 (**non-FGNR**) の検出率およびこれらに対する薬剤感受性について検討した。

方 法

菌検出を行った全対象症例は528例で、対象疾患は化膿性中耳炎および咽頭炎の急性症または慢性型急性増悪症とした。

対象患者において検体採取前48時間は何らの与薬がなされていないのを確認のうえ、採取検体について各種培地の組合せによるふるい分け同定を行い、次いで **API system** などによる生化学的性状を検討し最終同定とした。

また抗微生物薬感受性は **ABPC**, **CBPC**, **CEX**, **EM**, **DOTC**, **MINO**, **DKB**, **GM**, **AMK** の9種について行つたが、いずれも力価の明瞭なものを使用した。

成 績

1. **non-F GNR** の検出率；

咽頭ではいわゆる強毒菌が78.3%検出されたのに対して、**non-F GNR** は21.7%であった。

耳漏からは強毒菌86.9%、**non-F GNR** 13.1%であり、咽頭における検出率の優位が認められた。

また **non-F GNR** の検出順位は咽頭、耳漏ともに

Acinetobacter sp. が最も多く、次いで **Pseudomonas maltophilia**, **P. putida**, **P. cepacia**, **Flavobacterium sp.**, **Alcaligenes sp.** の順であったが、耳漏からは **Alcaligenes sp.** は検出されなかつた。

2. 検出菌の抗微生物薬に対する感受性；

i) **Acinetobacter sp.**

TC系に高い感受性を認めた。次いで **aminoglycosides** に中等度感受性を認めたが、**PC**系、**CEX**では耐性株が多く、**EM**も低感受性に留まつた。

ii) **Pseudomonas sp.**

PC系、**CEX**ではいずれもほとんど耐性であった。**P. maltophilia**は**TC**系、ことに**MINO**に対して比較的高い感受性を示したが、**P. putida**では **aminoglycosides** のほうに感受性の優位を認めた。

P. cepaciaは例数が少ないので **comment** を控える。

iii) **Flavobacterium sp.**

TC系と **EM**にはほぼ等しい感受性を認めたが、**TC**系、**CEX**にはほとんど耐性であった。

iv) **Alcaligenes sp.**

検出は1例のみなので **comment** を控える。

考 察

今回の検討で特徴的なことは、他科領域の **Opportunistic Infection** と異なり、重篤な基礎疾患と関係なく **Opportunistic Pathogen** を原因菌とする感染症が認められたことである。

このことは咽頭感染症を例にとれば、激しい咽頭痛や高熱を伴うにもかかわらず、全身状態は比較的良好である症例の多いことから類推できよう。すなわち、扁桃の病巣感染による遠隔病巣の重篤化や、中耳病変の頭蓋内への進展を除けば、いずれも病変は局所に留まっていることと関連するのではないかと思われる。したがって耳鼻咽喉科領域の **Opportunistic Infection** では **host** 側よりも原因菌側に視点を置いて検討する必要があると考える。

* 独協医科大学耳鼻咽喉科